



健康の輪



編集●全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局(結核予防会普及課内) 題字●初代会長 廣瀬勝代

カンボジアスタディツアーに参加して

愛媛県結核予防婦人会
事務局長 上田 和子



平成22年11月22日(月)14:00 公益財団法人結核予防会本部にて、「決して、金持ち日本人には、ならないように」と山下事務局長より、話をいただき、沖縄、鹿児島、群馬、大阪の婦人会や活動してくれている団体の人た

ちの合計10人で、結団式が行なわれた。

その後、成田ビューホテルに移動し、翌朝、7:30に成田に向かった。途中、ホーチミンでの乗り換え時間は、4時間ほどあり、なかなか、ゲートの表示が出ないことに驚いたが、なんとかプノンペン行きの飛行機に乗ることができた。その日は、ちょうど水祭りの災難が日本で報じられていた日だったが、私たちが到着したときは、落ち着いていた。ホテル

での夕食を済ませ、早い時間に休んだ。カンボジアと日本の時差は、2時間だ。1日得をした気分だった。

11月24日、ホテルで朝食をとり、7:30に出発。移動の車の中で下内団長より説明を聞く。G8で締結されたグローバルファンド(世界基金)の予算が5年にわたって出ることが決まったので、WHO、CATA(カンボジア結核予防会)、日本結核予防会(JATA)との合意書をかかわることができることになった。日本結



核予防会は、技術提供をするというお話だ。質のよい援助をしたい。それには、デジタル化を進めて、地方の人たちの診察がスムーズにできるようになるように技術を提供していく方針だそうだ。(どこからでも検査内容を見ることが出来る) その調印式に出席させてもらえたことは、とても光栄なことだった。結核菌というのは、喀痰(ラボ)の中の菌を検査して日本とおなじ治療法で行われるそうだ。これからは、10歳以下の子どもの結核の検査を試みる予定だそうだ。カンボジアは、国家予算の8割が外国支援に頼っている。その昔・・そう昔でもない時代にポルポト政権が集団強制収容所に知識人を収容して抹殺し、男女、子どもをわけ、農村や山村に強制労働をさせていた経緯があるため、その傷跡は、今もなお残っている。私たちにについてくれたガイドも4年近く両親と離れて強制労働をしていたところ、再び両親にあったとき、両親は、自分のことがわからなかったと悲しそうに話していた。

現在インフレ傾向にあり、物価が上がってきているようだった。JATAは、JICAと協力して、10年前からカンボジアに8億円の施設CENAT(結核予防センター)を設立し、結核予防センターを拠点にしている。

CENATから次のレナセールに行くまで車中より市内観光をし、昼食には、アモックとよばれる初めてのカンボジア料理に舌鼓をうつことができた。

レナセールは、キリスト教系の女性シェルターで日本人のソーシャルワーカーから話を聞くことができた。レナセールは、直接結核予防とは関係はないが、結核予防会の配慮で見学させてもらうことができた。保護されている女性たちは、現在、大人4人、子ども5人いたが、この2年半で150人の女性がシェルターを利用している。夫の蒸発、死別、DV、売春など理由は、さまざまであったが、行き場の無くなった女性を安心して安全に保護することを

目的としている。そこから何か手に職をつけ、自立できるように生活をサポートしている。

カンボジアの女性には、清潔という観念が無いので、料理コースのスキルトレーニングは、むずかしいが、洋裁、ハンディクラフト、ヘアードレッサーなども人気があるそうだ。識字ができないといったハンデがあるので、いろいろと難題にぶつかる。社会に出たときのフォローアップももちろんしている。日本のシェルターもそうであるように、10歳以上の男子は、母親と一緒にシェルターに、入ることができないので、孤児院や養護施設に引き取られることが多い。私たち婦人会も虐待・DVといったことに関して取り組みをしているので、興味深く話を聞くことができた。優しい男性にとっては、聞くこと自体しんどいだろうと思う部分はあったが、最近では、先進国などで、男性の被害者が多くなってきているので、男女問わずに考えていくことが必要でないだろうかと感じた。

その夜は、CATAの人たちとの夕食会(レセプション)が開かれたが、ポルポト政権が3年と8ヶ月と20日間続いたその間に、7人家族だったが、2人となったこと、留学していた人たちを呼び戻して、刑務所に入れ、殺してしまったこと、同じ人種で殺しあうということほど悲惨なことは、ないと話していたが全くそのとおりで。夕食会の席では、RONEAT(ロニアット)というカンボジアの伝統楽器を演奏しながら、そんな悲惨な出来事があったことがうそのように幻想的なリズムに合わせて天使の舞を踊っていたのが印象的だった。

11月25日 CATAの村のヘルスセンターには、産室もあり、乳児健診もできるようになっていて、診療所のような。DOTSの窓口もある。それぞれのセンターでは、レントゲンの設備はないので喀痰検査のみで、詳細については、CENATにおくってレントゲンをとることになる。センターには、12の村を3地区に分

けて、センターが管理している。50歳以上のリーダーが2人ずつおり、ボランティア(ボランティアになる人は、村の有力者で、村長がなっている)となって咳をしている人や体調の悪い人をセンターに連れてきたり、センターに行くように促している。

ヘルスセンターは、誰でもうけられている。というのは、人種差別があり、カンボジアでは、クメール人、イスラム族、中国系の人といった人たちが存在するからである。クメール人以外は、カンボジアからの援助がないようだ。ボランティアは、治療について、月に1度ミーティングが行われる。センターの情報を村の人に伝える。交通費は、実費以下支給する。村の病人を知らせて、医者がチェックをしてセンターに入った後で、毎日、毎朝、様子を見る。家で治療をしてよい人は、薬をもって行って飲むことを確認する。DOTS対策である。この対策がスムーズに行われるまで、10年かかったと話を聞く。



カリエス(正岡子規がかかった病気)が完治したという患者さんのお宅へ寄せてもらう機会にめぐまれた。狭い住居に14人がすんでおり、やっと座ることができるようになったと話していた。この病気は、肺結核と違ってうつることがないが、体が思うように動かない様子だった。

縫製工場見学:ここでは、集団健診を行っており、喀痰検査で結核と診断された人は、治療中は、給料も支給される。1,200人の労働者のうち、いままでは、4人の患者がいた。医務室があり、医者も常駐している。妊娠に対する産休制度が3ヶ月あ

り、結核治療は、6ヶ月間を要するのだが、1ヶ月目は、100パーセント、2ヶ月目から6ヶ月目は、60パーセント給料が支給される。それ以上になると、辞めることになる。しかし、縫製工場は、政府から委託されて仕事をしているので、政府からの指示は、きちんとおこなわれるので、働く人は、カンボジアでは優遇されているほうだと思った。患者のお宅でも縫製工場のお宅でも薬をきちんと飲んだか飲まないかの確認のために、飲んだ証拠として薬の空を残している。

今回のツアーは結核予防会のために、企業の中で、社会貢献をしてくださっているご夫婦と一緒にだった。日本の中で、自分たちの利益だけを追求するのではなく、グローバルな視点で物事を考えてくださって、支援してくれる人たちがいることに感激した。まだまだ、私には、知らないことばかりだと反省した。

JICA、CATA、CENATで活動してくださる方は、もちろん、大変なことだと思う。しかし、女性の立場から見ると、それを共に理解し、支える女性がいることを見落としがちである。働くこと、家庭にいることを女性の自由意志で決めることのできる社会こそ本当の意味での男女共同参画社会だと思う。昨今では、外で働くことのみが男女共同参画社会のようにいわれがちであるが、家庭の中で自立をしていること、このことも重要なことだということを付け加えてほしいと思う。

11月26日、アンコール小児病院を訪問、ここでは、訪問看護をはじめ10年になるお話を聞く。彼女もまた、日本人女性だ。村々をまわり、雨季の時には、道が寸断され、それでも訪問看護をしている。小児病院では、政府との約束で、大人は大人の病院で、16歳までの子どもだけを診るということになっているが、訪問看護では、家族のケアが大事だ。子どもが病気だと家族も病気かとおもうと必然的に調べていくことになる。衛生状態が悪く、栄養状態も悪い、清潔という観念がなく、普通

の下痢でさえ、命を落とすことも多いという。救える命は、救いたいという気持ちで日々活動されている。このアンコール小児病院は、無料で診てもらえることができる。しかしこの病院に来るまでの交通費を捻出できないでいる人たちが多い。入院中は、自炊し家族で過ごしている。食材も提供し、栄養指導のために調理方法も指導する。この病院は、サテライトクリニック（分院）をつくっ



ている。人材育成も行っており、カンボジアの医者を増やしている。子どもころから愛情が当たり前、ものもあり足ることをしらない日本の次世代を担う子どもたちをもう一度私たちは、考え直すべきなのではないか。

日本が戦後復旧できたのは、知識人といわれる人たちがいたことである。カンボジアには、そういった人をこれから造っていかねばならない。復旧はまだまだこれからなのだろう。

私たちは、木を見て森を見ず、そして、灯台もとくらしという言葉も忘れてはならない。

数を数えたり、地図を読んだり、言葉を書いたり読んだりすることが、当たり前の世の中にいることを忘れてはならない。

カンボジアの学校制度は、午前と午後の二部制にわかれている。公立小学校は、年間の学費が5ドル、それに対して、スクールバスは、月額7ドル。高いか安いかは、わからない。

買い物に立ち寄った場所では、10年前から西陣織が村から消えていた織物の原画を掘り起こして、村の女性に機織りを指導している男性に出会った。

カンボジアの人を育てる目的をもって、経営も機織りも村の女の人たちにさせていた。日本人であればある程度の情報もあり、その情報を処理する能力もある。情報がありすぎてうまく処理できないことがあるくらいだ。今、まさに人を育てるという気持ちで技術提供をしている日本人だった。孤児院にも参加し、注意書きとして、「訪問してくださる日本の方に、日本で流行っている言葉を教えないでください」と書かれてあった。

私は、言葉とは文化を象徴するものだと思っている。子どもたちがどれだけ言葉を使い分けられるかということ（区別できるということ）は、心の有り様について理解できることになるのだと思う。さらに、言葉とはとても大切だと感じた。

スナーダイクマエ孤児院の女性は、10年前は、男尊女卑のなかで話も聞いてもらえなかったが、地道な努力のおかげで一歩ずつ進展していった様子だった。この人たちもまた、カンボジアの人を育てると話していた。私たちはどうだろうか？日本人を育てているだろうか？

孤児院では、援助だけでなく、自分たちの自立ということを考えて、子どもたちの絵をTシャツにして10ドルで販売している。参加した人たちは寄付として何枚か購入した。帰国後もう少しほしいとJATAより連絡をもらったが、輸送が困難なため、無理という結果になった。



11月27日、アンコールワットの見学を1日とってくれたのは、ありがたかった。このような建造物をジャングルの中で、初めて発見した人は、私たちが感激したのだから、どれだ

け感激したことだろうと思った。もう一度行きたいと思わせてくれる場所だった。このアンコールワットは、カンボジアの人たちが一生のうちで一度は行きたいところというくらい、ありがたい場所らしい、その中の王様の仏像に手や足が欠けているものがあり、外国から来て初めて見た人はハンセン病だったのではないかと話したそうだ。史実を紐解いてみると本当にハンセン病だったらしい。

11月27日、帰りの飛行機に乗る前に、トンレサップ湖の水上生活を見学した。観光化が進んでいるようすだった。泥のような水で、皿を洗い、食物を洗うといった状況に驚いたことと、この水上では、学校や教会もあり、どうやって生計をたて

ているか日本に帰ってから不思議に思った。ワニや豚を飼育し、店を営んでいる人もいれば、観光船で生計を立てている人もいるが、貧富の差が激しいことを実感した。

今回のカンボジアスタディツアーは、私にとって、単に結核予防の支援の実態を学習するだけでなく、女性問題、男女共同参画問題、人権問題（ハンセン病や人種差別など）青少年問題など、婦人会のあらゆる活動につながっていることを再認識させてくれた。

権利を主張できる国に育った私たちには、想像できないことが起こっているのが、まさにカンボジアであった。

このカンボジアスタディツアーで

は、現地で生活をしていた岡田さんが言葉の足りない現地のガイドをフォローして、行き届いた説明をしてくださったので、私たちは、いろいろなことを感じ、無事にこのツアーを終えることができたのだと感謝している。

愛媛に帰って、病院を訪れたとき、JATAの関係でカンボジアに行った話をする、「まだ、結核なんてあったの?」と現役のお医者さんが言われたことはショックだった。婦人会は、複十字シール募金をして結核予防の活動をしていると胸をはって話してきた。

これからも婦人会の活動を少しでも多くの人にアピールできるようにしていきたいと思った。

スタディツアー団長・ (結核研究所 副所長) 下内 昭

今回の参加者は群馬県の山口さんご夫妻、大阪府の上ノ山さん、愛媛県の上田さん、鹿児島県の岩下さん、そして沖縄県の平良さんと中西さんの7名、その他、2名の引率スタッフと私の10名であった。出発の日には早朝から冷たい雨が降り肌寒だったが、ベトナム・ホーチミンシティを経由でプノンペンの空港に着くと、すでに夜であったが、暖かく（28度くらい）、乾季がはじまったばかりで湿気もなく、心地よかった。予防会から国際協力事業団（JICA）プロジェクトで派遣されている岡田先

生と山本さんの出迎えを受け、皆さんも安心して疲れも見せず、ホテルで軽めの夕食でくつろぐことができた。

カンボジアでの1日目は、まず、国の結核センター（CENAT）を訪問した。はじめに、CENATに事務所のある岡田先生から、結核の基礎的なお話のあと、結核予防会が1999年から、JICAを通じて、カンボジアの結核対策を技術支援してきた内容と成果について説明していただき、要点は次のようであった。「1999年当時は年間新しく結核患者が約19,000人発見されていたが、2009年には約40,000人に増加した。これは、従来、病院でのみ治療をして

わりに、塗抹陰性肺結核および肺外結核が増加している。これは、従来、塗抹陽性患者を最優先に患者早期発見に努めて来たので、発見の遅れが少なくなり、また、他の結核発見にも力を注ぎだしたために、塗抹陰性患者および肺外結核患者の発見が増加したと考えられる。2002年の結核実態調査（有病率調査）では、診療所に近い地域の結核有病率は遠い地域よりも低いという結果が出たため、診療所に近く、早期発見、早期治療が実施されれば、有病率が減少することが示された。従って、今後とも、地域における患者発見を強化し、喀痰培養の迅速検査や迅速感受性検査、またX線検査の活用により、さらに罹患率を減らすことができると考えられる。そして、今までの結核対策を客観的に評価するために、現在、第2回の有病率調査を準備中であり、2011年に実施される予定である」ということであった。今後実施される調査の成果が楽しみである。

そのあと、結核予防会結核研究所とCENATの結核菌の検査技術支援に関する覚書の署名式が催された。結核研究所はWHOの国際的な結核菌検査のレファレンス検査



ていたが、次の段階では公立診療所に拡大し、さらに次の段階で地域でもボランティアによる患者発見と治療支援ができるようになったための成果である。また、塗抹陽性肺結核患者数が頭打ちになり、その後、減少している。その代



機関として指定されている。従来、JICAプロジェクトを通じて検査機能を強化してきたが、JICAプロジェクトの有無に関わらず、今後、さまざまな資金をもとに、引き続いて結核研究所がCENATの結核菌検査機能を支援することを公式に表明したという意味がある。これによって、両施設間の技術協力を中長期的に計画的に実施することができるようになった。署名式には、WHOのカンボジア代表も出席し、日本の結核予防婦人会の参席も、結核予防会がカンボジアに対して、国際的に評価される技術協力によって貢献している状況を見ていただくよい機会となった。

その夜は、カンボジア結核予防会（CATA）による夕食会があり、カンボジア料理をご馳走になった。CATAは日本の結核予防婦人会の寄付により、活動が開始された経緯があり、CATA会長のモン・キさんはCATAの生みの親は日本結核予防会（JATA）であり、今後とも指導と支援をお願いしますという感謝のご挨拶があった。翌日は、CATAが支援するプノンペン市内のチャムカ・ドン診療所を訪問した。12の村、約24,000人で、イスラム教徒の多い地域を管轄しており、職員は医療助手2名、看護師3名、その他のスタッフ5名であった。今年に入ってから、38名の結核患者が登録されていた。ひとつの村から、結核ボランティア2名が来られており、いろいろとお話をお聞きしたが、その方たちは村長さんご夫婦であった。ボランティ

アは、普通、2,000人の村で2名選ばれるが、無償であり、村の中でもすでに責任がある人が選ばれている。ボランティアは患者発見のため結核の症状について、健康教育を行うとともに、患者が治療を受けるときに、ボランティアの目の前で薬を飲むのを確認するDOTSを実行しており、地域DOTSと呼ばれている。この地道な活動が、国全体の結核治療結果の向上に貢献している。

施設見学のあと、近くの幹線沿いにある患者さんの家を訪問した。家の中には15人の家族、親戚が住んでおり、2人しか職についておらず、生活は大変そうであったが、テレビはあった。靴をぬいで、16畳ぐらいの長方形の板の間の部屋に入ると、ご主人はイスラム教徒の白いかぶり物を着ており、患者さんは50過ぎに見える女性が、横になっていた。5年前から腰が痛くなって歩けなくなっていたのが、結核と診断されて、治療を開始し、丁度数日前に終了したところであった。今では、痛みも和らぎ、座ることもできるようになり、ありがたいと言われた。もし、結核対策がなければ、この方は、そのまま痛みが続いて、起き上がれなかったかも知れない。そう思うと、肺結核だけに目がいきがちだが、骨結核や腸結核などの肺外結核も診断さえつけば、無料で治療が受けられる

状況になっているのである。カンボジア社会の中で、イスラム教徒は少数派であり、一般的サービスを受けにくい傾向があるといわれるが、結核を含み、保健サービスには差がないように努力している。

午後は、プノンペン市内のTシャツの縫製工場を訪れた。従業員は約1,200名でほとんどが若い女性であった。工場内は冷房が効いており、作業はむずかしそうなミシンがけの部門から、のんびりと完成品をおっている部門まで、さまざまであり、全体的にリラックスしていた。勤務時間は全員午前7時から午後4時までの8時間労働であり、日本のかつての女工哀史の状況とは大いに違っていた。診療所には2名の医療スタッフが常駐している。現在、4人の従業員が結核治療中であり、診療所で直接服薬確認を受けていた。患者数は少ないが、年換算では人口10万対640と非常に高くなり、年齢が若く発病しやすい年齢層であること、やはり集団で作業をしているために、感染の機会が高いと思われた。そのため、CATAとして従業員に対する健康教育と早期発見に力を入れている。

結核関係以外にもいくつかの施設を訪問したが、それらのうちの1箇所だけ紹介する。JOCS（日本海外キリスト教協議会）の看護師の諏訪さんが働いている「レナセル」というカトリックのNGOが実施している女性シェルターである。プノンペン市内の住宅街にあり、現在、母親4人、子ども5人が生活し、今まで2年間で150人のお世話をした。助けを求める理由の7割は夫による暴力で、残りはホームレスである。



共同生活をしながら、職業訓練を受ける。大体3か月であるが、職場復帰は必ずしも容易ではない。

今回の旅では、アンコール遺跡群も見学した。カンボジアは1970年代にポルポトにより、300万人の命が失われ、今、ようやく復興しているところだが、西暦900年から1300年代に建てられたこれらの遺

跡の壁には、当時の王様、隣国との戦い、また人々の生活を垣間見るようなレリーフが限りなく描かれているため、ガイドさんの説明がいつまでも続く。その中には、滑稽な描写も多く、中世のカンボジア人のユーモアを知ることができ、時を超えたほほえましさがあった。そして、ポルポト時代は少年だったという、そ

の言葉と態度に自信なさそうなガイドさんが説明を重ねるほどに、おのずとカンボジアの歴史を誇らしげに語っているのに気付き、アンコールワットは彼らのまさに心の支えだとわかった。

多くを学ぶ機会があり、いつも、活発な質問と笑い声が絶えない楽しい旅であった。

平成22年度地区別研修会

北海道地区

北海道健康をまもる地域団体連合会
会長 齋藤芳子



平成22年度「第43回家族の健康をまもる講習会」は、全道各地から役員スタッフと参加者が集い総勢

107名で開催されました。

例年のとおり一泊二日の行程で、一日目はハイキングとパークゴルフ、屋内レクのメニューが設定され、早朝から出発してきた参加者は疲れも忘れたかの様に、それぞれ雄大な大雪のふところへ抱かれ真夏の猛

暑と深緑に汗を流しました。

この日、山下武子結核予防会事業部顧問が「結核および健康に関する意識と行動調査」のアンケート収集のために急きょご来場されました。

参加11団体による意見交換と全体交流会の後、「健康の歌」を全員で声高らかに唱和して、その後演歌ダンス「お富さん」とスクエアダンスを楽しみました。山下事業部顧問も笑顔でリズムカルにステップを踏まれ、親しく参加者と交流されました。

二日目は講演会による研修を開催、演題は「ピロリ菌と胃がん」「新型インフルエンザの現況と対応」受講生は熱心に講演を拝聴し充実した二日間の講習会を終了しました。

のために今、何ができるか〜」をテーマにシンポジウムが行われ、東北6県の代表者による事例発表がなされました。各県の特色を活かした活動報告を受け、今後も情報交換を密にしながら運動の活性化に努めてまいりたいと決意を新たにいたしました。また同時に、複十字シール運動をはじめ、健康づくり活動の輪を面として広げ、次世代に継承していくことが私たちの大きな役割であると強く感じたところです。

講演「結核対策の成果とこれからの結核対策」では、公益財団法人結核予防会の島尾忠男先生より、日本の結核対策の歩みと今後の課題についてご講演をいただき、家庭や地域における健康診断の受診勧奨



演歌体操も楽しく



地区別全体交流会発表

東北地区

福島県健康を守る婦人連盟
会長 佐藤裕子



晩秋の紅葉が一際美しさを増した福島県飯坂温泉において、県内外から170名のご

参会のもと東北地区結核予防婦人団体幹部研修会が盛大に開催されました。

研修会では、「これからの婦人団体の役割〜健（検）診受診率向上



が結核根絶に大きな意味を成すものと再確認いたしました。

特別講演「寝たきりにならないための介護予防」では、福島県立医科大学の安村誠司先生より、“寝たきりは自宅で作られる”というお話を伺い、介護予防において生活の質をいかに維持していくか、自立のための社会参加の重要性について学びました。日頃の活動を通じて、希薄化しつつある地域の繋がりを深め、心の健康づくりを目指して今後も力を尽くしてまいりたいと思います。

東海北陸地区

愛知県地域婦人団体連絡協議会
副会長 野田勝子



東海北陸地区結核予防婦人団体幹部研修会が、10月21日・22日の両日、愛知県で開催されました。

講演1「結核の現状について」

近年、服薬中断が原因でこれまでの薬が効かず、治療不能な「超多剤耐性結核」が出現といった問題は心配ですが、結核について正しい知識を持ち、きちんと理解し、きちんと治すことが、自分自身や身近な人たちを結核から守ることになります。

講演2「複十字シール運動について」



シール募金は、結核で苦しんでいる発展途上国の人々に役立っています。私も今まで以上にシール募金に協力したいと思いました。

講演3「子宮頸がんワクチンについて」

テレビや新聞でも話題になっていますが、早急に日本中の若年層の女子にワクチン接種の実現ができればと、切に願っています。

この度の研修会で、結核を深く理解するよい機会になりました。ありがとうございました。

近畿地区

奈良県健康を守る婦人の会
会長 中島祐子



平成22年10月18日(月)～19日(火)、ホテル日航奈良を会場に近畿地区結核予防婦人団体幹部

講習会が開催された。近畿2府3県より会員約90名が参加し、会員相互の親睦と和・輪・話を大切に活かされた講習会であった。結核は地球規模の課題であるが故に、日本に求められる国際貢献の重要性を再認識できたのではなかろうかと思う。シンポジウム

「目指そう!!結核半減
～今求められている対策は?～」
パネラー 2府3県から各1名
コーディネーター 山下 武子氏
講演

「結核予防会の国際協力事業と複十字シール募金の効果的活用」
公益財団法人結核予防会
事業部顧問 山下 武子氏
「子宮頸がんは予防できる
～ワクチンについて～」

グラクソ・スミスクライン株式会社
開発本部メディカル・アフェアーズ部門
ワクチン部 部長 安達 浩氏
その他
アンケート調査 「結核及び健康に関する意識と行動調査」
中央講習会報告

子宮頸がんは、予防にはワクチンの接種を勧めている。ワクチンは、10歳以上で若い人が接種することにより早期発見、治療、予防等ができると言われている。

結核は治る病気であるが、貧困と隣り合わせで増加中である。特にエイズ・結核・マラリアは世界3大感染症で新たに発生する結核患者(940万人)内50万人が多剤耐性結核。結核による死亡者数(180万人)内50万人がHIV感染者であると・・・世界の結核状況について新たな認識を得る事ができたのではないかと・・・特に行政と住民すべて一体となった取り組みが如何に重要であるかを再認識させられた講習会であった。

会員減少を如何に克服し、健康を守る婦人の会としての責務を愛の手として地域住民に届くよう啓発活動の改善も考えてみたい講習会であった。



九州地区

熊本県健康を守る婦人の会
会長 東家武子



第42回九州地区結核予防婦人団体幹部講習会は平成22年11月17日～18日熊本テルサにて開催さ

れました。

結核根絶をめざして ～今私たちにできること～ のテーマのもと九州8県より300名が集い講習が行われました。

1日目の開講式は実行委員会の熊本県健康福祉部長森枝敏郎会長の開講挨拶に始まり（公財）結核予防会小林典子対策支援部長の意識と行動調査、次に「地域の力で結核予防」又「結核の現状と課題」について独立行政法人国立病院機構熊本南病院呼吸器科山中徹部長兩名の講演が行われ1日目を終えました。

夜は夕食会を兼ねた交流会に移り熊本県健康を守る婦人の会が総力を挙げた歓迎会と一变。中村社中の鳴り物入りで「おてもやん」の踊りで幕開け、楽しい交流会となり九

州がひとつになってがんばろうと意識高揚が図られたと感じました。

2日目「結核予防取組みについて」のシンポジウム、座長に（財）結核予防会熊本県支部尾方克己副支部長、助言者に小林典子部長、熊本県健康を守る婦人の会会長の東家武子、シンポジストは宮崎県健康増進婦人の会、福岡県結核予防婦人会、熊本県健康を守る婦人の会、3県代表によるこれまでの取組みや今後どの様な活動を目指していくのか、時間オーバーの討論・質疑が展開され、尾方座長・小林部長のご指導、助言を受け有意義で盛会裏に閉講することができました。

今後の課題としては会員増が図れるような講習会等の啓発方法の工夫や時代の変革IT化等によるシール利用の価値観が薄れてきている。

現代にマッチしたグッズの開発が必要とされる。又、結核も終わっていないが他の感染症や健康増進についても時代の変化に応じた研修等を受け活動の活性化を図ることが要望されている。

各県の現状は様々であるが厳しい世相はどの県も共通している。～今私たちにできること～とは地域住民の幸福を願い行政と各種団体が連携を密に協働し合い楽しく元気にボランティア活動が続ける気概を持つことなのではないでしょうか。

わたしの 自慢料理（簡単レシピ）

白菜のサラダ

- 白菜の芯、葉をせん切りにする。
- ちりめんジャコをカリカリに（フライパンで）
- せん切りの白菜の上にちりめんジャコをのせポン酢で食べる（だいたい正油1：1でも良い）

鹿児島県 寺田エチ子



外国のあそび

平成23年度複十字シールの紹介

来年度（H23年度）は、安野光雅先生にデザインをお願いして10年目となります。

また、複十字シールを発行して60周年の記念の年です。今回のテーマは、「外国のあそび」です。原画の一枚は、人形劇のパペットでしょうか……。童謡に登場する動物ですね。さて、ここで問題です。うさぎ、狼、にわとりが登場する童謡ってなんでしょう？

よく見ると、うさぎのパペットには、「卯」と入ってあります。そういえば今年は、卯年ですね。他の原画では、子供が縄跳びをしたり、フラフープ、バトミントン、木馬、けん玉などに興じる姿が描かれています。また、衣装のチェック柄、個性的な髪型にも文化、気候風土の違いが忍ばれます。シールの中になにが隠れているか、シールができるまでのお楽しみ。

事業部資金課



シール原画

小学生に普及啓発

平成23年2月7日、東京の公立小学校にて「感染症」の授業をさせていただきました。

今回は6年生の3学期に感染症の授業をしていることを伺ったことから、結核を含めた感染症について子供達に問題を出しながら教科書に添った内容で行いました。

子供たちも、初めて結核菌・インフルエンザウイルスの強力なパワーを知って、今後の予防に対する意識が高まったことと思います。

更に、簡単な問題から、少し考える問題まで、子供の表情も様々ですが、今日から気をつけることが予防への第一歩になることを実感できた授業だったのではないのでしょうか？

また、今回の授業を通して生活の中で気がつかずにいたものを、身近に感じてもらったのではないかと思います。

今回で協力いただきました、学校関係者の皆様に感謝いたします。

ありがとうございました。



授業を終えて

子供達の感想

- ウイルスの大きさを犬とすると、人間の大きさは地球と聞いて驚いた。
- その小ささで、インフルエンザや結核にかかってしまうなんて、ウイルスはすごい力を持って居ると思った。
- うつらない、かからないために、病気を体内に入れず、体の抵抗力を高める必要があると思った。
- 面倒くさがらずに運動して体力をつけようと思った。
- 肩にある注射痕が結核の予防接種痕だとは知らなかったの、教えてもらって安心した。
- 病原体を体に入れない、病原体をなくす、体の抵抗力を高める、を心がけて、自分の生活を見直そうと思った。
- 結核などはあまり知られていないが、日本にもまだ患者がいることを知った。

教師の感想

- 専門家が授業に参加することで、児童の授業に対する期待感が高まる。
- 教員より専門性のある内容をわかりやすい言葉と資料で解説していただいたので児童の知識力が高まった。
- 事前に打ち合わせを行い、授業のねらいを確認したので、スムーズに授業が流れた。
- 「解説で学んだ知識をどう生かしていくか」について、考えさせる時間をもう少しとればよかったと反省した。

講師：公益財団法人結核予防会結核研究所 対策支援部 保健看護学科
科長代理 浦川 美奈子

日本COPD対策推進会議設立会と記者会見

12月16日（木）16時から設立会、続いて17時から記者会見が、日本医師会館5階507会議室（設立会）と501・502会議室（記者会見）において行われた。

1. 日本COPD対策推進会議設立会

設立会は、今村聡日本医師会常任理事が進行役として開会の口火を切り、議事が進められた。

議事は、「①規約の承認、②会長の選任、③副会長の選任、④幹事の選任、⑤啓発資料について、⑥その他」で、活発に討議された。

規約は、目的・構成・組織・役員・会議・細則・庶務について定めたもので、構成団体は日本医師会、日本呼吸器学会、結核予防会、日本呼吸



設立会の一コマ

ケア・リハビリテーション学会の4者が承認された。規約に則って役員選任に進み、会長に原中勝征日本医師会会長、副会長に永井厚志日本呼吸器学会理事長、工藤翔二結核予防会理事、木田厚瑞日本呼吸ケア・リハビリテーション学会理事長、羽生田俊日本医師会副会長の4名、幹事に相澤久道日本呼吸器学会常務理事、山下武子結核予防会事業部顧問、福地義之助日本呼吸ケア・リハビリテーション学会名誉会員・GOLD日本委員会委員長、今村聡日本医師会常任理事の4名が選任された。

啓発資料については、開業医向けB5判二つ折りパンフレット「COPD診療のエッセンス」を日本COPD対策推進会議編で作成・配布することが決定され、今後実情に応じて改訂を重ねて進歩・発展させていくことが確認された。今後啓発用ポスターを作成する

ことについての検討や、構成団体でそれぞれ発行している資料の紹介も行われた。

その他として、自由討議に移り、「COPD診療のエッセンス」配布によってかかりつけ医への啓発を進めると共に、「COPD」という言葉の普及など国民への啓発が重要であることや、健康診断の場を利用した取り組みについて話し合われた。また、日本COPD対策推進会議が設立され、今後これを全国展開するには、各都道府県にCOPD対策推進会議を置くことが重要で、構成団体の都道府県レベルでのより地域に密着した連携の重要性について認識を深めた。

また、日本COPD対策推進会議が平成23年度の「呼吸の日」イベント後援団体として参画することを決定した。

2. 記者会見

17時から、501・502会議室に場所を移して記者会見が行われた。20名近くの記者が集まり、今村聡日本医師会常任理事が進行役となって、副会長と幹事8名が取材を受けた。

最初に副会長4名が構成団体それぞれの特色を生かして日本COPD対策推進会議に貢献していく決意表明を述べた。

続いて質疑に入り、具体的健診方法、日本COPD対策推進会議の具体的な活動内容、元々「肺気腫、慢性気管支炎」と呼んでいたのをなぜ「COPD」としたか、その際のメリット・デメリットは？等の質問を受けて、これらの質問に回答・解説して、17時40分に終了した。

（結核予防会普及課）



取材に臨む役員一同

イラスト・カット募集

平成23年7月号（健康の輪No.102）に掲載するイラスト・カットを募集致します。

花・動物・その他、何でも結構です。

締切は、**平成23年5月20日**（当会必着）です。

全国結核予防婦人団体連絡協議会事務局宛

〒101-0061 東京都千代田区三崎町1-3-12

TEL：03-3292-9288

